III　アーバンデザインの取り組み

０．タウンスケープへのアプローチ

○　カミロ・ジッテ（Camillo Sitte）（独）

“Der Stadte-Bau nach seinen Kunstlerischen Grundsatzen”1889（SD選書175「広場の造形」）

大規模な伝統的公共空間（広場、道、都市の構成）を分析し、その美しさの理由を探し、デザイン原則を導き出す（適切なスケールで囲い込まれた空間の重視）　　都市計画の技術⇔美的価値

１．英国の**タウン・デザイン**派

街並み（タウンスケープ）への配慮のはじまり

1)　フレデリック・ギバード（Frederick Gibberd）

“Town Design”1953（鹿島出版会「タウン・デザイン」）

タウン・デザインに関する（新開発を含めて）要素を690事例から考察している（資料集）

『デザインは、建築や景観、道路等、各部門のデザインを包含するものであるが、個々の部門が一体に融合し、‘都市景観’として新しい表現をつくりあげるものである。この本で最初にとりあげるのは、この景観の構成についてであり、とくに視覚上の諸性質についてである。強くいいたいのは、都市デザインがひとつの部門として存在するということであるが、都市の様相は都市デザインのなすべき範疇を超えて展開しているので、都市の役割とか社会的あるいは科学技術的諸問題についても、都市の美的構成という面からの十分な検討が加えられている。この本では、建築、ランドスケープ、道路デザイン等の部門についても言及しているが、都市景観にかかわる部分についてしかふれていない。都市景観は、これらの部門が専門分化した技術となってしまってから質が低下したのである。各建築物の形について考察を行なったのは、都市景観の構成が建造物によるところが大きいからである。』

2)　ゴードン・カレン（Gordon Cullen）

“Townscape”1961（SD選書98「都市の景観」）1947年からArchitecture Review誌に連載

中世の街並みに隠れた空間、ひそんだ骨格や基盤をスケッチにより引き出す（写真では写り過ぎる）

近代建築に応用することで伝統的な街並みのなかに近代建築を挿入／既存の都市空間の中からよい部分を取り出す

単体の建築の評価は建築作品／「ひとつの建物は建築だが、２つの建物は建築をしのぐ芸術（タウンスケープ）である」／まわりとどのように関わったのかが都市空間として重要

3)　ケネス・ブラウン（Kenneth Brown）

“West End :renewal of a metropolitan center”1971

現存する空間を生き生きさせる小さな技／改善策

ロンドン・ウエストエンドの再開発

4)　トマス・シャープ（Thomas Sharp）

“Town and Townscape”1968（SD選書73「タウンスケープ」）

どのような過程で町（の中心部-Downtown）の物理的性格が構成されるかを検討するために、町の表情を観察・評価する。

どのように見えるか／空間の仕掛け／ランドマーク

Cf：Oxford Replanned(1948)など

２．日本の状況

1)　1930 年代（景観概念の導入）

Landschaft（独）＝土地の広がり

地理学では「景域」としていたが、三好学博士により「景観」と訳出された

Landscape（英）＝地表の可視性＝神がつくった自然（風景）に人の手が加わったもの

（天与）

⇕

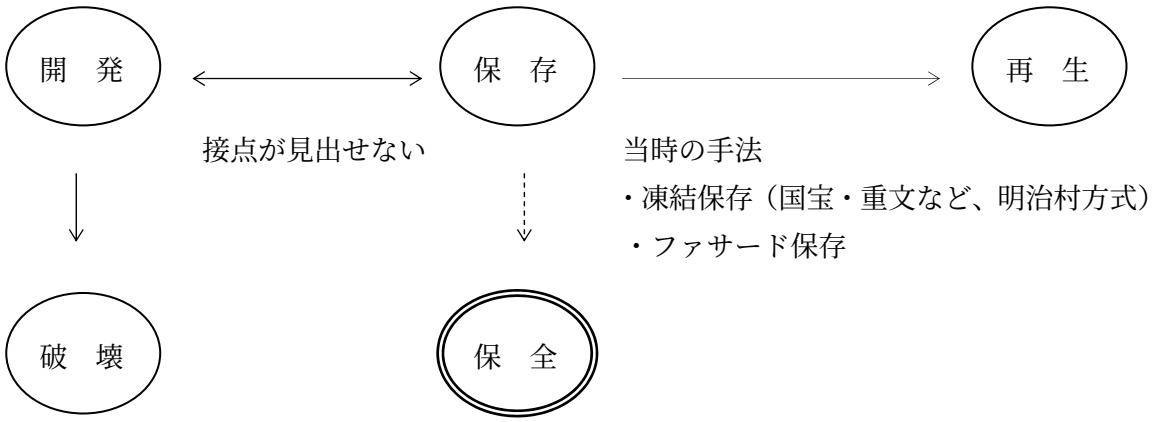
Townscape

（人的）

1960 年代に建築学・都市計画の分野に広がる　→　空間や建築物を用いてデザイン

2)　1968～1969 年ころの状況

歴史的空間の伝承／歴史的要素のみを残す＝街並み・タウンスケープへの配慮なし



1971～1977 年ころ

日本の建築物・街並み保存問題に対する状況＝地方でデザインサーベイの実習（歴史的建造物の採寸）

3)　歴史経過の中で

①明治・大正・昭和初期　＝　文明開化からの帝都建設

a.市区改正計画（1890（明治 22）年）

b.建築取締規則　→　市街地建築物法（1919（大正８）年）…用途地域、建築線、建物高さ、建蔽率、耐火・耐震・衛生

c.震災復興計画、田園都市構想（後藤新平）

d.都市計画法にもとづく風致地区指定（1925（大正 14）年）

e.住宅地の外延化

f.戦災復興

②昭和後期（戦後）

建築基準法・都市計画法による形態コントロール（1950（昭和 25）年）

100 尺→31m、65 尺→20mに読み替え

③高度経済成長期（東京オリンピック 1964（昭和 39）年、大阪万国博覧会（1970（昭和 45）年）

建築基準法の変遷

大規模ニュータウンの出現

建築家・研究者による啓発活動　←　チーム・テン、
ボストン大学の活動（例えば「パタンランゲージ」）

④昭和後期の街並み・景観づくり運動

公共建築物建設の潮流（ハコもの行政）

1970 年代になると各地の地方自治体で「都市デザイン」「都市美」「都市景観」を行政として積極的に取り組むようになった

⇔戦後の高度経済成長期における量的不足による画一的施設づくりの反省（質的な充実を目指す）

→伝統や歴史を活かした美しいまちづくり、景観・環境整備、都市のうるおい、地域の活性化

a.横浜市の都市デザイン行政

企画調整課都市デザインセクション（1971（昭和 46）年）

馬車道、元町、山下公園周辺、日本大通り地区、みなとみらい 21 地区などのデザイン、

市街地環境設計制度

b.神戸市の景観行政

1971（昭和 46）年　グリーン神戸作戦

1972（昭和 47）年　環境条例

1974（昭和 49）年　建築文化賞の創設

1978（昭和 53）年 10 月　神戸市都市景観条例の公布

北野・山本地区、税関線沿道地区の景観形成、建築デザインマニュアル

c.世田谷区のまちづくり

都市美委員会　「公共施設の改善に関する提言」（1981（昭和 56）年）

公共建築委員会　「公共建築のあるべき姿を提言」

都市デザイン室　「住民参加型」

⑤安定成長期

近代建築の保存と再利用／歴史的街並みの再評価

歩行空間・水辺空間などの多様な都市環境への取り組みと広がり

⑥低成長期

地域密着の住宅づくり（昭和 30～40 年代）の開始

公営住宅から地域住宅へ

HOPE 計画（Housing with Proper Environment）

地域に根ざした住まい、地域固有の環境を具備した住まいづくり

３．米国の状況

同時代のアメリカ合衆国の状況は以下のようなエポックがあった。

0) 1853 年第１回ニューヨーク万国博覧会で「客用」エレベータが公開（発明家イライシャ・オーティス）→はじめは見世物→1857 年Ｅ・Ｇ・ホーワート社（Ｎ．Ｙ.）に納入を最初に普及

1) 1870 年代　シカゴで高層建築物の建設が始まる。商業の中心がシカゴ市場からニューヨークに移り、マンハッタンに鉄骨造の（超）高層建築が建ち並ぶようになる→均質な各階フロアの提供

2) 1893（明治 26）年　ミシガン湖畔を会場としたシカゴ世界博覧会が開催（コロンブスのアメリカ大陸発見 400 年記念）

コーディネーター：ダニエル・バーナム

配置計画：Ｆ．Ｌ．オルムステッド、Ｈ．ゴッドマン

→フランス風アカデミックな古典主義（ボザール建築）と対称的な軸線の組み合わせ

⇩

古代ギリシャ・ローマ、ルネサンス、イタリア、フランスなど各種の建築様式によって構成されたホワイト・シティの実現

↑

当時の米国市民は自分たちの住む都市との違い（時代を感じさせる街並み、都市に適した公共空間のあり方）に驚き、これに習って都市を（ヨーロッパ様式で）美しくすべきという運動を開始する　＝　City Beautiful Movement（都市美運動）

3) 1915 年新イクィタブル生命保険ビル（地上 36 階・165m）が建設され、周囲の建物への威圧、道路の採光が社会問題となる

↓

1916 年　ニューヨーク市でゾーニング条例が施行され容積率、道路斜線制限が加えられるようになって高層ビルの形態に変化が現れはじめた。　＝　地上レベルのオープンスペースに囲まれた業務センター（搭状）によって密度を増加、スラム撤去を志向（1961 年全面改訂）

セットバック形態の出現

4) 1922 年フュー・フェリスによる「新しい建築」の発表＝セットバック・スカイスクレーパーの美的根拠を示す（セットバック・スカイスクレーパーに至る４段階）

5) 1929 年 10 月 24 日～　世界的経済恐慌　＝　都市開発の主体が民間投資から政府活動に

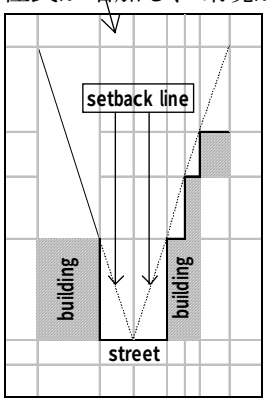
6) 1960 年ケビン・リンチが「都市のイメージ」を発表

都市像を人々がもつイメージにより構成する試み。現代都市を理解する手がかりとなった

7) 1972 年セントルイスのプルイット・アイゴー公営住宅団地事件

ミノル・ヤマサキ※設計の団地でアメリカ建築家協会デザイン賞受賞作品（1950 年代）

スラムクリアランスを目的として建設、従前の居住者が新団地に収容されたが、かつての気楽で親密な生活がなくなり、住民がわずかずつ減少。麻薬の売人など好ましくない住民が増加し、環境が益々悪化、結局ダイナマイトで破壊した。



※　Minoru Yamasaki（1912～1987）　米国現代建築家。ワシントン大学・ニューヨーク大学で建築を学び、1949 年に自己の事務所を設立。近代的なデザインを得意とする。N.Y.ワールド・トレード・センターは代表作品

４．20 世紀後半におこった都市の風景・景観・見ばえの特異性と類似性

主要な４つの要因により説明可能　…　全世界的に画一化した原因

＝　建築物、技術革新、都市計画、社会変化

1) 建 築 物－建築家の設計による／よらず、大量生産の如何を問わず最も目立つ人間の造形物
＝現代建築の美的原理となっている無装飾の角張った形態

2) 技術革新－鉄骨、商業用電力、自動車などのここ 100 年間で進展
＝新しい建築形態や生活様式を可能とした

3) 都市計画－20 世紀初頭に開発されたこの技術は、都市の構成要素のレイアウトと配置を規定した
＝＞他者を食い物にしようとする自分たち自身の劣悪な性向から自己を守り、ひいては健康や正義、平等に支えられたユートピアを実現させるという意図もあった。

4) 社会変化－先進諸国の現代都市ではほとんどの人が文字を読み書きし、快適な住宅に住み、オフィスで頭脳労働に携わり、血縁よりも瞬時に伝わる電気通信システムによって結びついている
＝郊外の消費者コミュニティ（郊外住宅地）や超高層オフィスの建ち並ぶ都心部の景観を形成
↓

5) **国際主義－**思想や流行は国境で完全に区切られるわけではない。かつては遅い移動速度のために普及が限られており、たいていは既存の地域的伝統に適応しながらある地方から別の地方へと伝えられていった。そのため、地方の慣習や建築に根ざした地域的な多様性は大きかった。しかし、上記のような状況の中、新しい建築技術と高速通信によって地域的な適応の可能性が大幅に減少し、指導的な企業、建築家・都市計画家は世界各地に移動し、世界中どこでも通用するデザインを持ち込んだり借用するようになった。